

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370131

研究課題名(和文) プッサン晩年の風景画における語りと寓意に関する総合的研究

研究課題名(英文) Research on the narrative and allegory in Poussin's late landscape paintings

研究代表者

栗田 秀法 (Kurita, Hidenori)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：10367675

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、とりわけプッサンの《ダフネに恋するアポロ》(1664年、ルーヴル美術館)について、中景の横臥像が準備素描の分析から「バットスを石に変えるメルクリウス」の脈絡から解釈できる可能性が存すること、作品の典拠の一つとしてレオーネ・エブレオの『愛の対話』(1535)におけるアポロとダフネの物語の自然哲学的な解釈が注目されるべきこと等を明らかにできた。その結果、自然の基本的要素の循環のテーマに月桂樹と関係した芸術家の普及の名声のテーマが織り込まれることで辞世の作にふさわしい構想から制作されたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study, concerning Nicolas Poussin's "Apollo and Daphne" (1664, Louvre), I suggested that a recumbent figure in the middle ground could be a shepherd Battus and that a passage from Leone Ebreo's "Philosophy of Love" (1535) could be a literary source for the artist.

研究分野：西洋美術史

キーワード：プッサン 風景画 アポロ ダフネ バットス レオーネ・エブレオ

1. 研究開始当初の背景

ニコラ・プッサン(1594-1665)の風景画は、2008年にニューヨークで「プッサンと自然」展が開催されるなど、近年関心が高まっている領域で、画家は1648-51年頃と1657年以降という非常に限られた二つの時期に風景画に集中的に取り組んでいる。前者の風景画は、フロンドの乱(1648-53)にほぼ重なる時期の制作されたもので、画家は内乱状態の祖国を、理性を失い情念に囚われた状態とみなし、乱れた情念のメタファーとしての嵐の風景と自然の理性的な法則の発現としての静謐な風景とが対比的に捉えられていた。そこには運命のいたずらとそれに対する療法としての知恵という新ストア主義の発想が背後に控えている。それに対して後者の風景画では、一見すると相互に脈絡のない物語が組合せられていたりすることに加え(《バックスの誕生》、「四季」)ほとんど絵画化されることのない場面が描かれるなど(《盲目のオリオン》、《アポロとダフネ》)画家の晩年の個人的な詩想の発露とも言われるその絵画世界の真の意味内容は未だ謎めいたままである。プッサンの風景画の本格的な研究は1944年のプラントの研究を嚆矢とするが、特に第一期の風景画については、ヴァーディが1982年の研究においてプッサンの書簡でも言及された「運命のいたずら」と嵐の風景が関連していることを指摘し、この時期の風景画の制作と受容のトポスが明らかにされたことが特筆される。本研究が主として扱う晩年の風景画に関しては、《バックス》についてはD.パノフスキーやプラントが、「四季」についてはザウアーレンダーが、《オリオン》についてはゴンブリッチが、《アポロ》についてはE.パノフスキーがそれぞれ図像学的な見地から1940-50年代に目覚ましい成果を上げてきた。もちろんそれらの研究に不明な細部が残っていることは当然として、それ以上に、これらの作品がいかに関人的な詩想の意味合いが強いとしても、やはり自己表現が確立する近代以前に制作されたこれらの作品がいかなる制作と受容のトポスにおいて構想されたのかについて解明する作業が大きな問題として残されている。プッサンの風景画をまとめて扱った最近のその研究においても、また、西洋近世の風景画を総括的に扱ったメロの著書においてもどちらかと言えば芸術論的な議論が中心で研究状況はそれほど変わっていない。他方、プラントが晩年の風景画とカンパネッラの著作との

関わりを論じ、また、クロッパー/デンプシー、フマロリが広く文化、思想的な文脈の中でプッサンの芸術を捉え直そうと試みたように、プッサンを広く西欧の文化的な脈絡の中で捉え直すことがプッサン研究における最近の大きな傾向である。

また、西欧近世の「文芸共和国(respublica litteraria)」における学問芸術の探求の背後には人間本性、恩寵と自由意志、美徳と運命、理性と情念をめぐる議論が厳然と存在していたが、プッサン晩年の風景画研究ではそうした視座に関しては必ずしも十分に研究に取り入れられているとは言えない状況があった。そうした視座を導入することで、晩年の風景画理解に新たな光を投げかけ、その総合的な把握が可能となることが大いに予想されたのである。

2. 研究の目的

本研究は、プッサン晩年に制作された風景画(《バックスの誕生》、《盲目のオリオン》、連作「四季」、《アポロとダフネ》など)について、絵画化された個々の物語や挿話が後期ルネサンスの文化的風土においていかに活用されたかを明らかにするとともに、西欧近世の「文芸共和国」において盛んに議論となった恩寵と自由意志、運命と美徳、理性と情念との関係をめぐる議論との関係を探り、制作と受容のトポスに回答した画家によっていかなる寓意的な内容が絵画的な手段を用いて行為遂行的に喚起されているかを明らかにすることに加え、プッサン晩年の風景画を西欧近世の文化史の脈絡の中での総合的理解を試みるものである。

3. 研究の方法

プッサンが参照したと想定される古代神話や当時の神話誌、あるいは具体的な挿話が16-17世紀の文化的な風土においてどのようなトポスで活用されたのかについての調査を進め、そうしたトポスが16-17世紀の文芸共和国における人間本性、恩寵と自由意志、理性と情念との関係をめぐる活発な議論とどう関わることについて考察する。

その上で制作と受容のトポスをめぐるそれらの知見と作品の視覚的なレトリックの分析からどのような寓意的なメッセージが行為遂行的に観者に向けて発せられているかを分析する。

さらにプッサンの風景画に関する国際セミナーを開催し、本研究の議論を深め、発信する。

4. 研究成果

最も重要な成果としては、プッサンの《ダフネに恋するアポロ》(1664年、ルーヴル美術館)について、中景の横臥像が準備素描の分析から「バトスを石に変えるメルクリウス」の脈絡から解釈できる可能性が存すること、作品の典拠の一つとしてレオーネ・エブレオの『愛の対話』(1535)におけるアポロとダフネの物語の自然哲学的な解釈が注目されるべきこと等を明らかにできたことが特筆される。

後者についてより具体的に云えば、「大地を流れる河から発する大地の自然の湿気の表象」(邦訳165頁)としてのペネイオス河と太陽神アポロの対比こそがおそらくは眼目となっているのであり、その対比にクピドとダフネの対比が重ね合されているのだと理解される。エブレオのテキストでは、「どんな樹木よりも太陽光線と大地の湿気の混合が多く見られる」月桂樹と名声のテーマが語られていることに加え、メルクリウスがアポロの矢筒から矢を抜き取るモチーフにも言及があり、プッサンの作品を統合的に理解するための手掛かりが複数存在している。画家はここで少なくともアポロとダフネの物語を借りて世界の基本的要素の循環のテーマと不朽の芸術家の名声のテーマを織り込んでいることは疑いなく、まことに辞世の作にふさわしいものでもあったと言えよう。この結果、晩年の一連の風景画(《バツコス》《オリオン》連作《四季》《アポロとダフネ》)ではいずれにおいても自然の基本的な要素の循環という共通した枠組みの中で構想が練られていることが判明した。これらの作品に通底する構想、プログラムを解明するための礎が築かれた点で大きな成果を上げることができたといえよう。

なお、ハイデルベルク大学からヘンリ・キーゾル教授を招聘し、日仏美術学会で日本人研究者を交え「21世紀のプッサン」と題した国際セミナーを開いた。その機会を通じて、自説を海外研究者に披瀝するとともに議論を深めることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

栗田秀法「プッサン作《ダフネに恋するアポロ》(1664年)についての最近の研究動向をめぐる若干の覚書き」、『名古屋芸術大学研究紀要』, 38巻(頁:105-117), 2017年(査

読・無)

栗田秀法「プッサン晩年の風景画における語りと寓意」、『日仏美術学会会報』35号(頁:116-117), 2016年(査読・無)

〔学会発表〕(計3件)

Kurita, Hidenori, "Man, Nature and God in Poussin's Late Mythological Paintings", 名古屋大学国際会議助成 "Religious space, ritual and memory"(宗教空間・儀礼・空間), 2017年2月5日

Kurita, Hidenori, "Poussin's Apollo in Love with Daphne in the Louvre", 日仏美術学会ワークショップ「21世紀のプッサン」, 2016年9月5日

栗田秀法「プッサン晩年の風景画における語りと寓意」, 日仏美術学会第135回例会テーマ「プッサン没後350周年 宗教画と風景画」, 2015年7月25日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

栗田秀法 (Kurita, Hidenori)
名古屋大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：10367675

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()